

危険な特ダネ 木野 工

新聞がその名の通り『新』しく『聞』くニ
ニュース報道の主役を降りたことを誰も疑わな
い。速報性では絶対に電波に敵わない。それ
でも、人がニュースを追って新聞を求める。
それは永い間の社会生活が定着させた慣習、
慣行だけではない。よく言われるように、新

聞の記録性が人に新聞を求めさせる。ニュー
スの報道にとつて、速い、ということは絶対
的な商品価値であるにも関わらず、社会は忙
がしくなればなるほど、ますます新聞を切実
に求めるようになる。忙がしければ、短い時
間に、要点だけを、かいつまんで、しかも瞬
時にして能動的に、社会にニュースの即報と
拡散（というよりは被覆、浸透などと言った
ほうが理解し易いかもしれない）をする電波
に、より必要性を求めるのが自然の成行きで
ある。それなのに、一見、矛盾した現象が新
聞と電波のニュース需要にはまだ続いている。
現象の解明は極めて簡単で、電波報道へ

の選択権が、放送・放映の内容的にも、時間
的にも、忙がしくなるほど制限されるとい
う単純な事情による。社会にとつては再録、再
報道の性格を持ちながら、随時に、自主的に
ニュース撰取の機をつかみ得る新聞が、重要
な報道機関となる。いつまで、こういう報道

の記録性がニュース報道の主役を演じ得るか
は知らぬ。当分は続くことは確かだが、いず
れは電波の報道機能が、もっと形を変えて、
現在の新聞の報道性、記録性の分野に踏みこ
んで来ることだけは確かである。

しかし、とに角現在では、忙がしい人ほど新
聞を必要としている。継続的にニュースを必
要とする人、社会の保証人的役割と弁護士的
役割と、歴史の証人としての役割とを必要と
する人たちにとつて、新聞の記録性は極めて
重要な機能を果たしている。

それ故にこそ、新聞が企業として成り立っ
ている。企業として成り立つ要因を備えてい

るから新聞製作事業は競合の、しかも他に類
例を見ないほど激しい競合の起るほど、魅力
ある企業として、いまだに衰えを見せぬ。日
本の一般商業紙発行部数四千六百万部（昭和
五十年三月、新聞協会調べ）セット売りの朝
・夕刊を東京など大都市では、かなりの部数
がそれぞれ一部として立ち売りされているの
で、これをすべて一部として計算すると、千
人当り五百二十八部という驚くべき数字は、
必要にして十分な数を相当上回っているであ
らう。普及率という呼び方をすれば、この数
値はもちろん世界一である。

商品がそういう状態に置かれると、自由主
義経済下の社会では当然ながら競合社間に激
しい競争が起り、過当競争は、意外な方法で
販路の拡張、拡大をはからせることになる。
自然の成り行きである。それがナベ、カマ合
戦となるのはよく知られているし、A・Y両
者間で、たかが（と言つては新聞界の事情に
無縁な人の表現になるのだが）囲碁教局の棋
譜掲載権とタイトル独占を巡って、一億数千
万円もの『権利金』の争いとなり、法廷で決
着をつけざるを得ない、全く奇妙な争いも起
る。金を出せという争いならわかるが、余計
に出すという争いなのだから、事情を知らぬ

人には奇怪とも馬鹿氣たものとも見えよう。争いはそれだけではない。目に見えないところの、取材・報道合戦も熾烈を極めていゝ。ニュースが「商品」としての性格をいまだに保っている証拠である。千二百円の新聞が千七百五十円の新聞の一〇%しか売れないというこの世界独特の現象も、信頼度と内容の深淺・多様性などから容易に説明がつく。

内容の充実を図っているうちに、日本の新聞は世界に類例のないほど、多数の記者を抱えこむことになってしまった。各社が同じ事情だから『記者クラブ』という懇親名目の規制機関を設けて調整をはからなければ、首相官邸でも国会でも、各省庁をはじめ、全国の老大な数に上る役所や警察では、取材のために本務が重大な支障を受けるほどになっている。ところが、そういう状態になると、本来は競争のための増員や常駐記者増加策が、逆に自動的な内部規制を生じさせて、これと言った競争が出来なくなる。いわゆる『特ダネ』は偶然以外に紙面に出現しずらくなつて来る。事実、そうなつてしまつた。古諺をもつて言えば『野に特ダネを遺すほど、現代ジャーナリズムは怠慢ではない』のである。問題はその先である。特ダネとは、他紙の

知らぬニュース、他紙の取材不能ニュースの意だが、この情報過多の時代に、そんな特ダネの転がっていることは奇跡に近い。しかし奇跡ではなくて、近い、のだから、存在することは存在する。しかし、本来の特ダネとは多少趣きを異にするものが殆んどである。

一つは、みんな知っていないながら、慣れずぎて書かずにいることを、うまく纏める。五十年元旦からM紙が掲載した『政変』という続き物がその典型で、あんなことは政治部記者なら誰でも知っていた。それを纏めて、日本の政治機構と政界と政治家を美事に浮かび上らせた。『田中金脈』問題も、とり上げ方が月刊誌の読物という特殊な形だが、あの文春原稿の中に『特ダネ』は一つも存在しなかつたと言つていい。しかし、大新聞の大記者は知つていても、表面的な事象はすでに報道済みだつたために、立花隆にはなれなかつた。なるうとする勇氣ある記者がいなかつたわけではないが、政界への異常効果を恐れた。津川雅彦・朝丘雪路夫妻の愛児誘拐だつて警視庁の要請を踏みにじれば誰にも特ダネ記者になれた。

もう一つは、やはり奇跡に近い大スクープが五十年五月十九日のサンケイ朝刊を飾つ

た。企業爆破犯人の『一斉』検挙である。これは、実は特捜本部さえ暫くは知らなかつたという二百人もの大忍者部隊の隠密捜査を狙つたサンケイの勝ち星だが、この忍者部隊のことは遂に書かず、検挙の前夜に、『あす朝決行』の確報を得て、異例の15版という特別版を用意し、大逮捕劇展開寸前に、配つた。若し、何かの都合で三十分踏み込みがおくれば、印刷中に洩れていたら、全員に逃げられ、サンケイは全紙面に虚報を載せたことになつていたかもしれない。各新聞社は事前にある程度のことには知つていたと思う。書いて組んで、刷つて配る、その機を選ぶところにだけ特ダネのチャンスがあつたのだ。しかし、あれは危険な賭けだつた。桐島、宇賀神の逃亡犯人は何かの方法で、何分前を知つたのではあるまいか。

サンケイは都内部数が少ない。夕刊で他紙が追いかけると、殊勲のサンケイだけが重大ニュースを落したと見られる恐れがある。それで、ほとんどそっくり夕刊に再録して、これも異例、昔なら絶対あり得ない。

新聞も商品、これからの『特ダネ』には常にこういう社会的危険性がつきまとうだらう。